四十八　小小説拾遺四　老生、『老生』を読む

いつだったか、そんなに前のことではない。花筏に乗って流れ着いた海辺で一人の老人に会った。もっともそれが夢の中の出来事だったのか、現のことだったのか分からない。どんなことを話したのかもよくは想い出せない。しかし、なぜか心地よかったという感じだけは残って、また会ってみたいと思っていた。そうして、いつもと変わらない日々を送っていた。心のどこかで、凡々たる生活にうれしいことでもないかと期待していても、そう特別のことが起こるわけではない。やはり変わらない日が過ぎていく。

あるとき、昼寝から目覚めてふっと気づくと、わたしの前に老人が座っていた。自分がとっくに老人のくせに相手を老人と呼ぶのも失礼だが、年齢不詳ながらわたしよりもはるかに歳らしい。どうも、あのときの人のようだ。「以前にどこかでお会いしたことがありませんか」と訊いてみても、要領をえない返事しかない。ぼんやりしているうちにお茶が出された。するとここはわが家ではない。座敷を見まわせば、やはりあのときの庵のような気もする。乾燥した花を入れたお湯を飲むと甘い。「これには氷砂糖が入

れてある。八宝茶といってめでたい茶じゃ、味わってお飲みなさい」、老人はそう言うと、自分も茶をすすって目を細める。いつしか二人のあいだに四方山の話が始まった。

いくつめかの話題のときわたしは、関連すると思い、物知りに見えるその人に尋ねた。

「西洋にくらべると遅れていた日本の国が近代化を始めたとき、社会は混乱を極め人々は苦労したことでしょうね」

「そうだろうね。君は明治維新と呼ばれている時代のことを言っているんだろうが、わたしはその場にいなかったからよくは知らないね」

その答えにわたしは肩すかしをくらったように感じた。というのは、それまでの話しぶりが、はるか昔から生きてきたようにほのめかしていたからである。そこで、質問を変えてもうひと押ししてみた。

「それでは、敗戦後の時代はどうだったのでしょうか?。第二の開国だったと言う人もあるぐらいで、もう一度近代化の苦労をなめたのだと思いますが」

「その時代は君の時代で、君もいろいろ考えているようじゃないか。第二次世界大戦後の世界はたしかに一つの大揺れに動いた時代だね。どの国も、それぞれの歴史を引きずる特有の仕方で変化した。しかもそれはかつてないほど同時代的に世界中で起き

たことで、それぞれの変動はつながっていた。そんな途方もない時代に社会がどのように変化し、人々がどんな苦労をしたかを話していたらきりがないじゃろう」
「たとえば、文学はその社会の様相を反映するものだと思いますが、その時代と人々の生活は文学にどう表わされたのでしょうか」
「おや、文学かね。わしの弱点を突いてきたな」、そう言うと、間合いをとるように、「君にそういう質問をさせたのは何かな？」と訊いてきた。
わたしは、めったに小説を読まないのに、先日、現代中国の作品を初めて読んでいた。それが頭に残っていてこういう質問になったのだ。わたしが賈平凹という作家の名を挙げ、読んだ小説が『老生』だと言うと、老人は、「ああ、あれね」といくらかほっとしたようすを見せて、語り始めた。
「君も老人になってたまには人生をふり返ることがあり、ああいう表題の作品に関心を抱くようになったとみえるね。あれはなかなかおもしろい小説だった」
「それぞれの部分がとてもとっぴな挿話を含んでいて、全体としても物語が空想的なフィクションだという印象を与えます。それでいて、こういうことが自分の同時代に現実に中国で起きていたのだと思わせます」

「それはあの小説の手柄だろう。小説という言葉が中国で生まれたことをご存知かな?。文字で書き物をするようになった初めは、祭りごとに関することじゃったが、時代が下ると、政治から歴史の記録まで広く文書をつくるようになった。そのうち、文字を書ける人士が文章をつづりたくなって、町中の話などつまり四方山の話を書きとめたりした。それが小説という言葉の起源じゃ。そういう手慰みは軽んじられていたが、唐・宋の時代になると、「伝奇」として楽しまれるようになった。フィクションを含む小説はそうして始まった。まあ、あまり耳にしたことのない珍しい話じゃな。この意味は、ちょうど英語の novel に対応するね。小説という言葉は、「唐宋伝奇集」にあるようなとても短い物語にはふさわしかったのじゃが、近代になって日本の坪内逍遥が欧米の novel に対応する言葉として採用して、今では日本でも中国でもそれを使うわけじゃ。『水滸伝』のような大長編でも小説という表記を使うのは少し違和感が残るがね」

「ああ、そうすると、『老生』の空想的なそれぞれの部分は唐宋伝奇集以来の伝統を正しく受け継いでいるのですね。それらの挿話を物語に連ねるのも、『西遊記』や『水滸伝』の流れを汲むわけですか」

「そうとばかりは言えないだろう。『老生』は現代の小説で、空想は手段として使わ

れているのだ。全体として時代と社会と人々を描き出そうとする意図がはっきりしている、と思うね」

「なるほど。たしかに作者の賈平凹が、あとがきで、自分が老生なった心境を語り、あの作品に書いたことは自分が目で見て耳で聞いて体験したことだと言っています。その体験をあのように修飾して語るのは、まだ一党支配の体制の下での社会批判でもあるからでしょうか」

「小説というものは、社会の中で暮らす作家がその生活で体験したことに反応して生まれる。その反応はとても複雑で、しかもそれをフィクションとして作り出すのだから、現に見るように小説は種々さまざまだ。そして、そこにはいつも社会批判があると言えなくもない。だが小説は、いわれからして、まず第一におもしろくなくてはいけないよ。君もそういう小説として『老生』を読んだはずだ」

質問をはぐらかされて、わたしは小説の内容について尋ねた。

「『老生』は四つの物語からできていますが、いずれも秦嶺の山村の出来事です。そういう山奥を舞台に選んだので、ところどころ眉に唾するようなああいう物語にできたのでしょうね。作者はその地方の出身ということで、挿話の種をたくさん見聞きし

ていたと思われます。秦嶺山脈はどういうところでしょう?」
「秦嶺か、なつかしいね」
「えっ?」、奇妙に思って顔を見たら、その口がもっと予想外な言葉を発した。
「わしは秦嶺で生まれたのじゃ。びっくりした顔をしなさんな。お望みなら、秦嶺のことをいくらでも話してあげられるよ。たとえば、秦嶺の一角にある中国五山の一つ華山のことなどつぶさに話してあげよう」
わたしはあっけにとられたが、不思議な老人自身のことに気をとられると話題が逸れるので、小説の第一話について訊いた。
「秦嶺のお生まれなら、第一話が語る国共内戦の時代のことをご存知でしょう。実際にあのようだったのでしょうか?。小説で語られる遊撃隊の物語は、人民解放軍の活躍とずいぶん違うようですが」
「うん、国民党と共産党との戦いを観たよ。だが、中国は広いからそれぞれの省での内戦のありさまは違っていたな。共産党主力軍が行軍した長征のときの国民党軍との戦いは激しかった。共産党が延安を根拠地にしてからはようすが変わったね。第一話は、日本の侵略に対抗するための国共合作が成立するまでの内戦だ。それを人口の多い地方を舞台に語ることもできたろうが、作者は、その後の三つの物語を同じ舞台で

語るために、自分のよく知っている秦嶺を選んだのだろうね。秦嶺のような山奥の村々が、空想的な物語を組み立てるのにうってつけだしな。しかし、山深いところならどこでもよいというわけではない。作家は、国共内戦から共産党が天下を取り、文化大革命を経て改革開放に至るまでの社会を描くのに、古来中央政府の支配力が十分に届いていた秦嶺の村々が適当だと考えたのじゃろう」

「たしかに、現代中国の変遷を雲南省の山奥の物語として描くのは難しいかもしれません。でも、…」

「君は、あのような伝奇小説の舞台を大都市にしてほしかったかね。わしは自分の故郷の物語として聞きたいね。都会なら、中国現代史は別様の小説として語られるだろう。でも、それはほかの作家の仕事だ」

年齢不詳の不思議な老人は、不相応で予期できない言葉を交えながら話を続ける。

「秦嶺のことを知りたいのなら、インターネットでグーグル・マップの衛星写真を見たまえ。関中平原の南にある広大な山岳地帯だ。陶淵明は長江中流で南山を詠ったが、古く南山といえば秦嶺にある終南山のことだった。中国古代の周・秦・漢の都は今の西安あたりにあったので、都から南に見える山とは秦嶺のことだ。伯夷・叔斉があそ

この首陽山に隠れたように、都の人士が隠棲するとしたら秦嶺ということになるわけだ。うん、わしが言いたいのは、秦嶺が古くから知られたところだったということ。つまり、山深いところだが、そこに住む人々は古くから文明の恩恵に浴していたということじゃ」
「それにしては、秦嶺遊撃隊はわずかな人数で、うさんくさい者たちばかりですね」
「しかし、あの隊長は延安の革命指導部の指揮下にある。戦闘をおもしろく語るとすればああいうことになるのじゃろう。あるいは、のちに語られた人民解放軍の活躍ほどのことではなく、山奥であった遊撃戦は小規模だったかもしれない。君はうさんくさい者と言うが、中国で新王朝を建てた皇帝には盗賊上りもいたのだよ。『史記』に登場する有名人はたいてい誇張して書かれている。尾ひれを削り取れば、『老生』の遊撃隊員とそれほど違わない者たちもいるのじゃないか。先ほど小説は正史などと区別する言葉だと言ったが、訂正して、『老生』はまた『史記』も受け継いでいると言ってもよいかもしれない。正真正銘の革命指導者である毛沢東や周恩来も、関中平原北方の山中の延安で、崖に掘った横穴の家で暮らしていたのだから、あの時代のことを今聞いたら、どうしたって、伝説のように思われてくるのは仕方のないことさ」

「あなたは、どう受けとればよいのかわからない話し方をされますね。ところで、あの当時秦嶺で、南京政府は小説が記述する程度に支配力を発揮したのですか」

「それは中国の政治風土に関わる問いだね。先ほどからときおり古代からの歴史にふれることがあった。さて、秦嶺には古代国家秦の名が刻まれているが、その秦の始皇が始めた政治体制が今日までの中国の枠組みを決定づけたと言っても大きな誤りにはならない。この体制は日本の封建制とは違う。中国でも近代以前の古い制度を封建的と呼んだりするが、それは、封建制だった西欧で中世の体制を呼ぶのに使われる言葉を翻訳するのに、秦の前の周で諸侯を封じたときのこの言葉を使ったからだ。日本の封建制は西欧の封建制に似ているが、自分を始皇帝と呼ばせた人物以来、中国は始皇の版図と支配体制をお手本にしてきたのだ。諸侯として封じられたのは皇帝の息子たちか例外的な建国期の功臣だけで、原則として中央集権の支配制度だ。何度かの動乱期に群雄が割拠することがあったが、何代も世襲して支配する土着の諸侯というのはいなかったのだ。広い中国では広大な土地をもつ土着の大地主がいたが、それは政治的な支配者とは違う。帝国の大小の行政区は中央から派遣する長官が管轄するのだ。長官の権限が強いから、王朝の力が弱まれば、大きな軍を管轄する長官が軍閥化するということが起きた。その例を歴史に数多く見ることができるね」

老人は、ときどき「ふー」と息をしてしばらく宙を見つめて休み、また話を続ける。
「辛亥革命で清王朝が倒されたときの軍閥もそういう類だった。その後国民党政府の指令がおおよそ行きわたったころを、『老生』第一話は描いているわけだ。秦嶺の北側のふもとに西安がある。満州の軍閥だった張学良が日本軍に追われてそこにいて、国民党政府の配下にあった。そこへ蒋介石が督励に行って例の西安事件が起きるわけだから、秦嶺にも国民党政府のにらみが効いていただろう。そういう場合には、県の行政府と治安部隊は中央の指令に従って行動するというのが伝統なのだ。反政府武装集団である秦嶺遊撃隊と小競り合いがあってもおかしくないな」

話題を第二話に移したくて、わたしは、老人が息を休めたタイミングに訊ねた。
「第二話では、その秦嶺遊撃隊が一躍勇者たちだったとなり、一本の杏までその伝説のしるしになります。革命政府の指令に従って、新しい役人や村長たちが村の切り盛りをしますね。ああいうことは、混乱もなくできたのでしょうか」
「あの描写は、山村の庶民のうごめきとして混乱を表現しているとわたしは思うがね。山村で革命が起きたのではない。しかし、国全体としては武力革命だった。第二次世界大戦の硝煙の中から生まれた政権は、マルクスの言うように、どの国でも銃剣によ

るものだ。そういう政権に逆らえる者はいない。日本では「終戦」とか呼んでごまかしているが、占領軍が支配したのだ。占領軍が旧政府にそのまま行政をやらせたので、それが弱められた点もあり、あからさまに見えないだけだ。庶民が武力で支えられた政府の行政支部の支配を受け入れるのは、始皇帝以来習慣づけられているのだよ。どの国でも、支配者が変わっても、そのあり方が大きく変わる契機はあまりない。だが、革命という言葉の本場の中国で起きたのは、支配者の名を変えるだけのものでなく、経済的支配の構造を変えようとしたのだから、社会は大揺れに揺れたのだ。あの物語では小さな山村の出来事としてそれが表現されている」

「ええ、土地改革ですね。インドのような国では独立しても土地改革が出来なかったのですから、大したことなのでしょう。でもそれにしては、物語での農地分配はスケールが小さいですね。パール・バックの『大地』に登場するような大地主はいないわけです。土地改革を描くには秦嶺のような山村はふさわしくなかったのではないでしょうか」

「一つの小説にあまり大きすぎる荷物を負わせてはいけないよ。毛沢東に言わせれば、あの出来事も実に重大な社会主義革命の実践だっただろう。当時の利害関係者の気持ちや振る舞いを考えるのに、事の大小は重大ではない、と小説家は判断したかもしれ

ない。ところで、そういう君は、日本で行われた土地改革をどう受けとめているのかね」

「農地改革と呼ばれている日本の土地改革は、銃剣が有無を言わせなかった点で似ているでしょう。大きな平野の少ない国ですから、たいていはあの物語で語られたようすに近かったのでしょうね。わたしの海辺の集落に小作地からの上りだけで裕福に暮らした家が一軒ぐらいはあったのでしょうか?。先日、一つの葬式講の解散前の会食で、酒の入った老人が、あの家はスーパーができてかなりの地料をもらっているが、あそこはもともと小作地だったと言ったそうです。秦嶺の山村と同様な葛藤があったのだと分かります」

「そうだね、年寄りの記憶にまだすこし残っているわけだ。しかし、日本と中国の最近までの経済発展をインドとくらべて見れば、土地改革が社会状況の変化に役割を果たしたと言えるだろうね。ただし、中国で土地の所有者になったのは政府で、共産党政府が経済を資本制に変えるという離れ業を実行した今、その土地を開発してお金をかせいでいるのは政府だ。そして、お金に群がる「老$」や「¥生」がいるのはあいかわらずだ。それは第四話で語られている。しかし、金融資本が現在ほどの規模になってみれば、かつての土地改革もそれに踊らされた人々にとって遠いものとなった。

もっとも、君の話のように、個々の家計にそれは遺産として残る。社会主義革命を経験しなかった西欧では、封建領主の姿を変えた遺産をたどることができるからね」
「ふん、よく知らんことを気どって話しても仕方ないな……」、しばらく思いを巡らすようすをしていた老人が、急にとんでもない話を始めた。
「ああ、わしがあの弔い師を知っていることは話したかな?。わしは、あの人の遠縁で、秦嶺のあの辺で採れる薬草を商う行商人じゃった。函谷関を越えて黄河を下り、洛陽、開封、さらに東へと売り歩いた。東は日本軍に占領され、天津あたりまで行ったところには商売もあまりうまくいかなくてね。とうとう、そこで同じように流れ流れて来た日本の婦人と所帯をもって暮らすようになったよ。そうこうするうちに日本が降伏した。混乱の中で日本人は帰国することになったが、いい加減なわしは、日本人だということにして夫婦で日本に行くことにした。こうして今、わしは君と四方山話をすることになったのじゃ」
「あなたはあきれた話をしますね。まあ、そういうことにしておきましょう」
「君、わしの話を信じなくちゃこの壮大な四方山話は支離滅裂になるよ。わしは薬草売りだったが、それにはちゃんと由緒がある。こうして日本に流れ着いたわしは徐福

の末裔なのだ。不老長寿の薬をほら話だと思うかね。あの小説で、弔い師はたいそう長生きだったと言われているではないか。わしも長生きだということは君もうすうす分かっているはずだ」

目をぎょっとさせながら年齢不詳の老人は話を続ける。

「徐福のように日本の港に着いた、引揚者と言う仮の姿でね。いつもわしは仮の姿でおるわけだがね。君は中国の大戦後の混乱に目が行っているが、日本も混乱していたことを知らなければならない。港に着いたら、そこの住民が水を売りつけた、仮にも同胞であるわしにじゃ。その地に住み着いた人々もいて、新開町という公営住宅地ができたよ。アメリカの占領軍も来ていて、気晴らしに山に入って小銃を発射したそうだ。拾った銃弾を見せてくれた人がある。先ほど出た農地改革も実施された。つまり、日本でもいろんなことが起きたはずで、賈平凹のような作家がそれを題材にしなかっただけだ。いや、小説を読まない君が知らないだけだろう」

「はあ…」

「大戦後の混乱を経験した日本で、文学がそれをどう描いたかというのが君の関心だったはずだが、『老生』に当たるどんな小説があるのだろう?」

「わたしによく分からないから大老師であるあなたに聞いているのです、大江健三郎の四国の山中の物語ぐらいしか読んでいませんから。あそこにはすこし似た語り口がありますが、歴史的な事柄は主題の背景でしかないと思います。日本の近代への過渡期を描いた小説として頭に浮かんでいたのは、島崎藤村の『夜明け前』です。でも、それは読んでいません。戦後に日本の作家が取り上げた主題は、中国の作家とは違うのでしょうね」

「そういうことになるかね。しかし近代と格闘した時期には、たとえば魯迅のような作家は、明治・大正期の作家と共通する問題に立ち向かっていたのじゃないだろうか。君の口ぶりをまねれば、わしもよく知らんが」

「小説の描き方はどうでしょうか。『老生』はほとんどストーリーの連続で出来ていますが、大江健三郎の小説はもっと人間の心むしろその底の方で起きているだろうことを考えさせませんか」

「ああそれは、男女の交情を描いても、『紅楼夢』と『源氏物語』とで違うところだな。中国語の漢字の羅列はかつて人間の連綿とした心理を記述するのに得意でなかった、とする説がある。『老生』は中国伝統の流れを汲んでいるのだ。心理描写ということでは、紫式部以来、日本の文学にはそれを敷衍する風土があったのだと思う」

「風土論でことをおさめるのは好みません。これほど世界各地の文学にさらされている時代だから、中国にだってさまざまの描き方をする文学があるのではないですか？」

「さあね」

「また、はぐらかすのですか」

「薬売りに答えられないことを訊かれても困ります。大戦後の混乱を経験した国にどういう小説が現われたかの評判程度なら話せますよ。それも君の関心だったはずじゃが？。インド生まれのラシュデイが、ホメイニ師によってその首に懸賞金をかけられる前に書いた『真夜中の子供たち』は、いまだに混沌を残すインドを描いて評判の作品だった。その空想のスケールはさすがに幻術の国だね。南米コロンビアにはガルシア＝マルケスの『百年の孤独』がある。海外生活が長くこの作品も国外で書いたのだが、あの空想小説はコロンビアの社会状況と無縁ではないだろう。君も聞いたと思うが、半世紀もの内戦を終結させる合意文書が署名されたのはおとといのことだ。ところが、国民投票がそれを否決したから、まだ尾を引くことになるね」

「それらとくらべれば『老生』の空想は小ぶりだとおっしゃるのですか。もしそうだとしたら、それは政府の文学に対する締めつけが厳しいせいですか？」

「たしかに、ノーベル賞をもらった作家が亡命したがね…。ところで、映画『赤い高

梁』を観たかね、もう一人のノーベル賞作家莫言の書いた作品だ。この人にしても賈平凹にしても、ああいう種類の空想的な物語になるのには理由があるのじゃろう」
「あなたは文化大革命が理由の一つだとおっしゃりたいのですか？」
「先ほどから鋭く突いてくるね。うん、彼らはその「文化大革命」とやらを体験したのだ。理不尽な体験をまじめに記述する気はしなかっただろう。それに、まだまだ剣呑だからね。そして、あの文化大革命のあとに同じ国で、仮面を取り替えたかのような「改革開放」だ。二つの物語をどう接合して語ればよいかむずかしかっただろう。改革開放を見者として観た作家が、第四話もその前の第三話も大きな空想として語る気はしないだろうからね」
「『老生』の四つの物語に登場して演じる役者は変わりますが、あれほど激変した四つの時期を同じ語り口で語りますね。文化大革命という世界史上でも特異な時期を、小さな遊撃隊の伝説と農地の分配譚の前二話とおおよそ同じ調子で語ります、山村の洗練されていない庶民の政治に踊らされてのドタバタ劇であるかのように。毛沢東はそれがどんなものになってもよかったのでしょうか。あれはあとでふり返ってみるとおかしなものですが、人々は何に動かされていたのでしょうか」

「君は、特別に高等な警察が思想の名で人間を拷問したのを知らないわけではないだろう。その時代、日本もおかしな状況にあった。別の国にもひどいことがあった。形のちがうものが中国でも起きたのだな。人間は優れた思想をもっているが、その思想の名でどんなことでもやってのけることができる。書物しか読まない理論家だけにかぎらず、ある種の権力志向者は人間というものを知らないのだ、自分を含めて人間がたいそう未熟なことを。世の中が浮動するとき、率先して尋常でないことをする先走った人間が出ることを、しかもその筆頭が自分だということをね。だから、東洋でも西洋でも、昔のもののよく判った人は中庸を説いたのだ。そういう人間の愚かしさを、賈平凹は身に染みて体験したから、あのように記述したのじゃないか。日本の読者は、よそ事として読んではあそこから学ぶことはできないだろうね」

「結局あなたは、人間は未熟で、世の中が激変しても人間は変わらない、とおっしゃるのですか?。文化大革命を経験した人々は、第四話で、すっかり変化した状況に対して、第一話や第二話と同じく、第三話とさえちがわない物語を演じます。こう理解していいでしょうか」

「永く生きてきたわしには、人間のすべての物語が大してちがうようには見えないね、

君にはもっと別の考え方をするように勧めるけれども」
「それは作者の言いたいことでしょうか」
「小説を読者がどのように受けとるかはさまざまだ、とする言い方が現代ではやはりだから、わしは請け合うことはできん。しかし、各話に置かれる『山海経』は、遠いところから山や海をしたがってそこに暮らす人間を見るように誘導する。社会と人間が変わっていくことに『山海経』が関心をもっているようには見えない。そこでわしは思う、人間はいつまで経っても変われない。人間は社会をつくって生きる生き物だからよけいにそうで、人と人とのあいだの行き違いをなくすこともできない、と。わしのように世を逃れて暮らすのは、自分を変えることを諦めて暮らすことだね。そうして初めてわしのようにいつまでも生きることができるわけじゃ」
「そうですか?。でも、あなたの主張はどこかおかしいのだと思います」
「わしの真似をしろとは言ってないぞ」
「賈平凹は、自分の考えを魯迅のように小説以外に書いていないのですか」
「それはあるだろうよ、日本語訳がないとしても」
困った顔をしてわたしは続けた。

「あなたのような見方をすれば、第四話の改革開放の時代の人々が水を得た魚のように動き回るのが理解できます。第一話から第三話でも、村人たちの振る舞いはほんとうのところ同じようなものだったということですね？」

「前にも中国の政治体制のことでほのめかしたように、中央権力の支配のもとで、庶民は政府の命令が頭上を通り過ぎるのにじゃまされないようにして暮らしてきたのだ。世界中のどこでも、わしのような中国生まれがなにかやっていて、そういう生活が得意なことを証明している。中国人は商売上手なのさ。うるさい主義を言わなくなって、どんな色の猫でもネズミを捕ればよい猫だと言い出したら、みんなが昔のやり方を思い出してネズミを追い始めた。官僚機構の頂点が皇帝か総統か共産党かは、猫の色を問わないのと同じだ。おっと、こう言うと皮肉が過ぎるだろうね」

「そうですね。現在中国が世界の国々に文句を言われながらやっていることも、その延長上にとらえることは可能です。多くの日本人の見方はそうですよ。中国の政府と官僚は昔からの帝国のように振舞っている。商売の得意な金持ちたちは、その数が人口に比例して多いのが脅威ですが、昔ながらに巧みに事業に励み、他方であい変らず広大な地方に貧乏な暮らしを強いられている庶民がいる、と」

「まじめに言えばそれは皮相な見方だ。たしかに、各国の人間の行動様式は歴史的に

つくられるけれども、世界が緊密につながっている現代、中国でも、世界に共通するさまざまなことが起きているはずで、ほんとうは、外から見えないいろいろな考え方があると思うね」
「ええ、そうでしょうね。それにしても、日本人と中国人のあいだで落ち着いたつきあいができるようになるまで時間がかかると思います」
「気長にそれを待つのさ。現在の中国の興隆を冷静に見れば、資本制経済が行きわたっていなかった賃金の安い国に発展の条件があったということだろう。昔日本人が、今でもそう思っている者も多いが、自分たちは特別に高度成長に長けていたと考えたけれども、結局は似た条件が前段階の経済を発展させたのだろうよ。日本とくらべて分かることは、悪条件と見られていた国が大きくて人口の多いことが、経済の規模を決定する第一の条件だったということだ。秦嶺の村人の第四話は、中国で起きたことを小さな寓話として語ろうとする。作家は現代中国の興隆を覚めた眼で見ているのだろうね。老生になった賈平凹は自分の人生をふり返りながら、中国の社会とそこでの人間の生を遠くから眺めている」
「ところで、最近、わたしは『世界国勢図絵』というのを読みました。その統計の数

字は、各国の状態とそこでの国民の暮らしを表現しています。一九八〇年代の『世界国勢図絵』とくらべてみたら、日本の隆盛が終わって衰退期に入っていることが一目瞭然でしょう。日本人のわたしには一番身にしみることです。今、首相や日銀総裁がどんな言葉を弄しても無駄です。むしろわたしは、人口が日本の半分しかない英国がまだ経済統計でそれなりの数字を出していることをうらやましく思います。現在の日本がやっている政策で、今後、英国ほどパーフォーマンスが挙げられるか心配するからです。ところが、数字を詳しく見ると、英国の国民がフランス国民ほどの分配を受けていないことまで分かりますから、日本が米国や英国の真似をしようとしていることも心配です」

「君は心配性なのだね」

「ええ、心配性ですよ。ともかく、『世界国勢図絵』の数字をよく見ていると、さまざまなことが分かります。たとえば、とんでもない米国の大統領候補者がメキシコからの移入者を非難するのを聞いて、日本人は単純にメキシコを貧しいと思うのでしょう。でも、経済統計の数字は、ここ数年、メキシコの工業生産が急に上向いていることを教えます。経済はトランプほど単純なゲームではないのです。よく考えてみれば、その工業資本は米国から注入されたものでしょう。メキシコの生産増大の利潤の大き

な部分を米国の投資家が得ていることになります。メキシコから米国への流入者が米国の労働者の働き口を奪っているという言い分の方も、その安い労働者が米国企業の競争力の下支えをしているわけで、ウォール街のビジネスマンは別のゲームをしているのです。メキシコの生産増大は北米自由貿易協定の成果だと宣伝されるでしょうが、だれが一番成果を挙げたのでしょう」

「もう一つ目立つことは、中国の統計数字が、ほとんどの分野で日本と比較にならないほどの規模だということだろう？」

「そうです。改革開放以来の経済発展で中国の工業統計は大きく伸びたのだということが確認できます。日本人はそれを見ないようにしてきたのですね。でも、全体的に見て気づくことは、工業分野以外で中国の統計数字はもともと大きかったのだろうということです。一人当たりで見れば数字は大きくなくても、国土が広くて人口が多いから、農業生産などは大きかったはずですね。資源だってそうです。今、鉄鉱石などオーストラリアから大量に輸入して、オーストラリアの対中政策に影響を及ぼすほどですが、中国にも鉄鉱石その他の資源がたくさんあることを知りました。開発が遅れているだけの話なのですね。アメリカ合州国が大国としての中国を意識していることがよく理解できます」

「なるほど。やっと、君の話が先ほど来のわれわれの話につながることが見えてきた」
「はい、わたしたちは四方山の話をしてきたのですが、賈平凹のする物語を巡ってでした。それがほのめかしているのは、『山海経』の見方に倣っているということでした。『山海経』は、中国と呼ばれる中心地から、遠く四方を眺めて山や海とそこの資源や動植物を叙述しました。そして、『老生』はその眺め方から人間たちを描きました。ところがわたしは、『世界国勢図絵』を読んで、ああ、これが現代の『山海経』だと思い当たったのです。今やすべての人間が世界はグローブだということを考えなければなりません。中つ国は球面上のどこでもよいのです。中国の達成も次のフェイズに入って新たな物語が生まれることになるでしょう。世界中の老生の観る「第五話」はそういう球面上の「山海」で起きる人間たちの物語になるでしょう」
「ほおー、君もそういう大演説をやるのだ」
「えっ」

二〇一六年、十二月